

C O R R E N T E

Centro Culturale Italo-Giapponese di Kyoto

イタリア通信 ⑪

* 二つの権力 ~Frammenti di verità II~ *

深草 真由子

パレルモ地検の判事パオロ・ボルセッリーノがコーザ・ノストラによって殺害された「ダメリオ通りの虐殺」の、二十年経った今でもなお残る謎の数々についてはコレンテ九月号で見た通りである。その導入部でボルセッリーノとファルコーネを「反マフィアの専門家」として紹介したが、正確に言うと、彼らは法律の専門家であり、法の忠実な執行者としての職務を遂行していただけであって、「反マフィア」というイデオロギーを掲げてマフィア退治に励んだという意味ではない。そもそも彼らは判事であり、第三者として中立な立場で審理するのが役目なのであって、本来マフィアと闘うべきは国家なのだ。



【ジョヴァンニ・ファルコーネ判事】

もともとは国家という巨大なシステムに対抗する別のシステムとして誕生し、勢力を拡大したマフィアであったが、次第に国家の中枢を味方として引き込むことに成功したようである。要するに

「国家 vs マフィア」という構図は幻想なのだ。反体制の極左テロ組織「赤い旅団」を国家当局は壊滅させることはしても、非・反体制のマフィアの犯罪に真剣に取り組むことはないであろう。市民の無知・無関心をいいことに問題の本質をごまかし、マフィア問題に取り組む政治家、検察官、国防警察関係者やジャーナリストらを、「デマゴグ」「共産主義者」などとレッテル貼りして孤立させるためのプロパガンダを展開し、反・反マフィア的な感情を市民に植え付ける工作さえも、必要となれば行うのであろう。

さて、ボルセッリーノ判事が殺害された「ダメリオ通りの虐殺」であるが、これは単発の事件ではなく、以下に挙げるように、コーザ・ノストラが当時画策した一連のテロリズムによる悲劇の一つにすぎない。標的を背後から襲って射殺する古典的な方法や、自動車に仕掛けた爆薬を遠隔操作で爆発させる派手な方法を用いて、国家機関の要人を抹殺し、イタリアの文化・歴史のシンボルである建造物に損害を加えることで、国家の権威を失墜させることがテロの狙いであった。ピサの斜塔を爆破するための準備までも秘かにすすめられていたというから恐ろしい。コーザ・ノストラの残虐性を生々しく見せつけられ、戦慄を覚える。

- 1992年 -

3月12日、シチリア選出の欧州議会議員で、当時首相であったアンドレオッティの側近サルヴォ・リーマの殺害。

5月23日、ジョヴァンニ・ファルコーネ判事と妻、三人の護衛警官の殺害。

7月19日、パオロ・ボルセッリーノ判事と五人の護衛警官の殺害。

9月17日、マフィアと関係のあった実業家イニャツィオ・サルヴォの殺害。以上4件はすべてパレルモ近辺で企てられた。

- 1993年 -

(1月15日、「ドン中のドン」とされたサルヴァトーレ・リナが十五年の潜伏生活のすえ逮捕され、新たにベルナルド・プロヴェンツァーノが君臨する。これ以後テロはイタリア本島に広がって一般市民を巻き込むようになるが、それはトップ交代に由来する戦略の変更によるものだろう。)

5月14日、ローマ市内で軽自動車爆発。マフィアの犯罪をテーマにしたテレビ番組の司会者、マウリツィオ・コスタンツォが標的であったようだが、本人は無傷。負傷者二十四名。

5月27日、フィレンツェ、ウフィツィ美術館近くで自動車爆発。生後二カ月の赤ん坊を含む一家四名と大学生一人が死亡。



【フィレンツェの爆発現場、破壊されたプルチ家の塔】

7月27日、28日にかけての深夜、ミラノの近代美術館近くに仕掛けられた爆弾で五名が死亡。一方、ローマでは二か所で爆発。「真実の口」広場近くのサン・ジョルジョ・イン・ヴェラブロ教会とサン・ジョヴァンニ・イン・ラテラーノ教会の壁面が破壊されたが、死傷者はなし。この夜、首相官邸の電話回線が外部の何者かによって妨害されている。

9月15日、パレルモで反マフィアの神父ピーノ・ブリージ殺害。

- 1994年 -

1月23日、ローマのオリンピック競技場の駐車場

に、爆薬を積んだランチア・テマが仕掛けられたが、遠隔操作の失敗により不発。国防省警察を狙ったものであったが、もし爆発していれば、大勢の一般市民も犠牲になったことだろう。



【ピーノ・ブリージ神父、2012年10月に列福された】

イタリア中を恐怖で震え上がらせたテロのエスカレーションはここで突然途切れる。そのことは幸いであるが、同時に「なぜ？」という疑問も浮かんでくる。マフィアは、国家から何かを得ることができた、あるいは得る目星がついたために、テロによる脅迫を繰り返す必要がなくなっただけなのではないか。これはあくまで世間でささやかれている憶測であって確証はないと断った上で、マフィア裁判で活躍した検察官 Giuseppe Ayala の著作 *Troppe coincidenze* (Mondadori, 2012) を主に参考にしながら、二大権力の間にどんな駆け引きがあったのか、その謎に迫ってみたい。

マフィア側が国家に要求していたものとは何であったか？それは刑事施設に関する法律の条項 41-bis の破棄であった。41-bis は、囚人の自由を徹底的に制限する非常に厳しい措置として、1995年欧州評議会の拷問禁止委員会によって非人道的だとされたこともある内容である。しかしイタリアでは、とりわけ危険だと判断された囚人が、自分の属する犯罪組織や、刑務所内にいる他のメンバーと接触するのを阻むことは、犯罪予防と治安維持のために必要不可欠であるという意見もあった。なぜならマフィアのボスは、刑務所にいな

がら違法ビジネスを続けたり、外部にいる部下に殺害命令を下したりすることが実際に可能だったからだ。41-bis によって、そういったことは不可能でないにしても困難になる。その結果、拘留中のボスがその組織における支配力を維持することはできなくなり、次第に疎外されることになる。

41-bisによるマフィアに対する厳しい措置は、ファルコーニが法務省の刑事部長であった時に考えていたもので、彼の死後すぐ、1992年6月8日に暫定的に導入された。そしてボルセッリーノが殺された翌月の7日、国会は事態の深刻さを重く受け止め、41-bis は成立した。もし、闘う姿勢を見せた国家に対して、41-bis を撤回させるためにマフィアがテロで脅迫を繰り返していたのだと考えれば、94年にテロを突然止める理由は説明できない。なぜなら、この点について国を屈服させることはできず、41-bis は二十年経った今でもあるからだ。

92年から94年は政治的にも大混乱の時代であった。92年2月には政治家と企業の贈収賄疑惑に対するミラノ地検の捜査が開始される。4月の総選挙では戦後一貫して政権を担ってきた政党「キリスト教民主主義」が大幅に票を失い、後に解党に追い込まれる。最後の首相アンドレオッティはマフィアとの癒着疑惑で、社会党書記長クラクシは汚職事件関与の疑いで捜査の対象となり、後者はチュニジアに亡命する。首相の座はイタリア社会党のアマートに移り、9月には通貨危機でリラを七パーセント切り下げ、それから一年足らずで非議員・無所属のチャンピ内閣が発足する。この政治の混乱の渦の中から台頭してきたのが、当時実業家として名をはせていたシルヴィオ・ベルルスコーニであった。彼は、マルチェットロ・デッルトリ(ベルルスコーニが設立した広告代理店の会長であり、ベルルスコーニが保有する持株会社の代表取締役。現在、上院議員。マフィアとの癒着で訴追されている人物)らとともに、92年の夏から新党を立ち上げる準備を進める。当初はスローペースであったが、豊富な資金と人脈を駆使

し、古い政治に失望した市民の支持を見事に集め、あっという間に首相になった。

- 1994年 -

1月18日、「フォルツァ・イタリア」党設立。

1月26日、ベルルスコーニ、テレビ電波を利用したの政界進出宣言。

3月末、総選挙。「フォルツァ・イタリア」両院で第一党となる。

5月10日、第一次ベルルスコーニ内閣発足。

政治家ベルルスコーニの登場と同時に、マフィアのテロが終息した…??

ボルセッリーノ判事が仏人記者の取材に、ベルルスコーニとマフィアの間接関係を示唆しており、そのインタビュー映像の存在が判事暗殺の動機の一つとなったという可能性を重罪院が示していることは前回述べた。ベルルスコーニの建設業、テレビ業にマフィアからカネが流れていたという証言も多い。また、テロに関与したことを自白し、検察の協力者となって重要で信憑性のある証言をしてきた元コーザ・ノストラ構成員スパトゥツァは、2009年に次のような供述をしている。「1994年1月、ローマのヴェネト通りのバルでジュセッペ・グラヴィアーノ(スパトゥツァのボス)と会った。彼は嬉しそうに言った。『全部解決したぜ。俺たちの要求は叶えられたのだ、あの話を巧いこと進めてくれた真面目な方々のおかげでな。88年89年に票を稼ぐだけ稼いで、俺たちに戦争を吹っかけてきた社会主義者らとは違うよ』と。そうして彼はベルルスコーニの名前を挙げた。『Canal 5のあの男か?』『その通り』。それからもう一人、同郷の男の名前も挙げた(デッルトリはパレルモ出身)。グラヴィアーノは、この真面目な方々のおかげで、我々は国を手中に収めたのだと言った。」

もしかしたら…と考えるだけでぞろぞろしい。真実が明らかになる日は来るのだろうか。

(元当館スタッフ)

イタリア発月刊日本語新聞



イタリア在住日本人と日本人観光客のための情報誌

編集・発行 NIPPON CLUB SNC
Via Torino, 95 - 00184 Roma, Italy
Tel. & Fax : (06) 4743. 212
E-mail : comeva@nipponclub.it
URL : www.nipponclub.it

『素晴らしき自転車レース⑭』

～パイオニア“pioniere”たちの時代～

谷口 和久

●先代 Campionissimo たち

今や自転車界で“Campionissimo(最上級のチャンピオン、チャンピオン中のチャンピオン)”といえ
ば 1940～50 年代に活躍したファウスト・コッピそ
の人を指すが、実はコッピは三代目の
Campionissimo なのである。となると、コッピの前
に二人の Campionissimi がいたわけで、初代はピ
エモンテ出身のコスタンテ・ジラルデンゴ、二代目
はロンバルディア出身のアルフレード・ビンダ。い
ずれも 1910～30 年代に活躍した、いうなれば「神
話の時代」の男たちだ。前号(2012 年 8 月号)で紹介
したボッテッキアも時代的には重なるが、片や
ボッテッキアがフランスのチームに所属してフラン
スのレースを中心に活躍したのに対し、ジラルデ
ンゴやビンダは母国のチームに所属し、ジロ・デ
ィ・イタリアをはじめ、ミラノ～サンレモ、ジロ・デ
ィ・ロンバルディアといったイタリアのメジャー・レ
ースで数々の輝かしい戦績を残したこともあり、イ
タリアでは伝説的存在となっている。さらに、二人と
も、引退後は監督あるいはコーチとして後進を指
導しチームをまとめ、イタリアにおける自転車競
技の発展に大いに貢献した。特にビンダは監督と
して、バルタリ、コッピという二人の強烈な個性を
とりまとめ、彼らを勝利に導いていったのである。



【左よりコッピ、ビンダ、バルタリ】

ジラルデンゴの方がビンダより 9 歳年長で、
1893 年ピエモンテ州南東部のノーヴィーリーグレ
の生まれ。奇しくもコッピとは同郷である。19 歳で
プロデビューし、早くも翌年にはイタリア選手権で
優勝。以後、第一次大戦をはさんで、このレース
では九連覇を成し遂げた。それ以外に主なところ
でも、ジロ・デ・イタリア 2 回、ミラノ～サンレモ 6 回、
ジロ・デ・ロンバルディア 3 回、その他のレースも
上げだしたらきりのないほどの勝利を挙げた。非
常に息の長い選手で、第一次大戦前の 1912 年に
デビューしてから第二次大戦前の 1936 年まで、な
んと 20 年以上にわたりプロ生活を送ったのである。
当然、第一次大戦中はキャリアが分断されたわ
けだが、ちょうどこの時期は選手としても登り調子
であるべき 20 代の半ばだ。コッピやバルタリた
ちも同様に大戦でキャリアを奪われたわけだが、二
十世紀の前半というのは、なんと酷な時代だっ
たのだらうと思う。



【コスタンテ・ジラルデンゴ】

ビンダは 1902 年にロンバルディア州北西部の
チッティーリオで生まれ、1922 年に 20 歳でデビ
ュー。ビンダの走りは流麗を極め、肩にコップを乗
せて峠を越えても、中の水は一滴たりともこぼれ
ていなかったと言われている。

●レース出場を断られた王者

ビンダは 1925 年にはジラルデンゴをおさえてジロ初制覇。翌 1926 年にはイタリア選手権で、それまで九連覇と圧倒的な強さを示していたジラルデンゴの十連覇を阻止。1927 年から 29 年までジロ三連覇を達成すると、翌 30 年のジロでは、なんと主催者から「賞金分の金を出すから、レースに出ないでくれ」と懇願されるほどに。主催者としては、誰が勝つかわからない「ミステリー」を求めて、ということだろうが、一方で王者の走りを見たいというファンも当然多かったであろうから、この措置はいかがなものだろうか？ましてや、自国の選手が自国のレースを走るのだから。フランスのレースをアメリカ人が連覇しまくったのとは、話が違おうと思うのだが。

ただ、それまでの戦績を見ると、この措置もいたしかたないと思えてくる。ビンダの勝利数は、27 年は 15 区間中 12 区間、28 年は 12 区間中 6 区間、29 年は 14 区間中 8 区間と、3 年連続で半分以上の区間をおさえてしまい、観客もそうだが、なにより周りの選手たちが戦意喪失してしまっただけで盛り上がり欠けたというのが実情のようだ。



【世界チャンピオンジャージを身にまとったビンダ】

ビンダはまた、自転車プロロード世界選手権の

初代チャンピオン、すなわち初の「世界王者」でもあった。世界選手権は、1日で終わる「ワンデー・レース “Corsa di un solo giorno”」と呼ばれるレース形式で行われる。片や、何日もかけて各地を回るジロやツールは「ステージ・レース “Corsa a tappe”」と呼ばれる。ビンダは 1927 年、1930 年、1932 年と 3 回の優勝を果たし、いまだこの記録を越えるものはない(タイ記録はメルクスをはじめ他 3 名)。

ビンダが初優勝を飾った 1927 年の第一回大会は、ドイツのニュルブルクリンクで行われた。車好きの方ならご存知だろうが、F1 グランプリや新車のテスト・コースとして有名な自動車用サーキット・コースである。ちょうどこの年にオープンし、こけら落としイベントのひとつとして、自転車の世界選手権も行われたのである。テスト・コースに使われるだけあって、アップダウンやコーナーなど大変厳しいコースであるが、ここをビンダとジラルデンゴの二人は変速機なしの自転車で走り切り、他の選手たちが変速機付きの自転車に乗っていたにもかかわらず彼らを置き去りにして、見事ワンツー・フィニッシュを決めたのであった。

●ニックネームは人気の証

ジラルデンゴもビンダも、出身地からめたニックネームがつけられていた。ジラルデンゴは“Omino di Novi (ノーヴィのやんちゃくれ)”、ビンダは“Trombettiere di Cittiglio (チツィーリオのラッパ吹き ※ビンダはオフシーズンにトランペット奏者として働いていた)”。ニックネームで呼ばれていたということは、単に強いというだけではなく、人々に心から愛された証といえるだろう。マルコ・パンターニの“Il Pirata (海賊)」、エディ・メルクスの“人食い鬼”、ベルナルド・イノーの“ブルターニュの穴熊”、クラウディオ・キアッピッチの“Il Diavolo (悪魔)」、マリオ・チポツリーニは“スーパー・マリオ”、などなど。筆者が知らないだけかもしれないが、近年のレーサーで、単なる名前の省略ではなく、愛すべきニックネームがつけられているような選手はいるだろうか。

●パイオニアたちのセルフコントロール

ジラルデンゴ、ビンダとも、非常に有能な選手であったという他に、たいへん興味深い共通点が

あった。それは、イタリア人としては珍しく(?)、性に対してストイックだったということだ。ジラルデngoは、ビッグ・レースの前は奥さんと没交渉であったということだし、ビンダにいたっては現役中は独身をつらぬき、引退まで結婚を「おあずけ」にしたというのだ。殊に前者の真偽のほどは、もちろん筆者の知るところではないが、それほどまでにレースにかけていたということは間違いないだろう。後にビンダは、若手選手が奥さんをレースに連れてきたりすると苦々しい顔をしていたということだが、個人的にはこんな頑固なおヤジたちが大好きだ。

こんなビンダのこと、日常生活もきわめて模範的であった。朝は5時に起床。まずジムで軽く汗を流し、その後ロード・トレーニング。食事の栄養バランスにも気を遣い、夜は9時に就寝。レースの時には、生卵を飲みながら走ったという。今でいうアミノ酸チャージの先駆けだ。

自転車のおかげか諸々の節制のたまものか、ジラルデngoもビンダも八十すぎまで長寿を全うしたという。



【競り合うジラルデngo(左)とビンダ】

【参考資料】

Daniele Marchesini, *L'Italia del Giro d'Italia*, il Mulino, 2009
 Pier Bergonzi & Giuseppe Castelnovi, *100 anni di Giro*, Vallardi, 2009
 William Fotheringham, *A Century of Cycling*, Motorbooks Intl, 2003
 『ジロ・ディ・イタリア 峠と歴史』(安家達也,未知谷,2009)
 『イタリアの自転車工房』(砂田弓弦著,アテネ書房,1994)
 Wikipedia 関連情報
www.museociclismo.it

(当館スタッフ)

… 会館だより …

イタリア語 無料体験レッスン

1月より開講の冬期イタリア語講座に向けて、体験レッスンを開催します。入門者向け。事前予約制。

- 梅田: 大阪駅前第4ビル
- 1/6 (日) 13:00~14:30
- 1/7 (月) 19:00~20:30
- 四条烏丸: ウイングス京都
- 1/7 (月) 19:00~20:30
- 京都本校: 日本イタリア京都会館
- 1/8 (火) 11:00~12:30
- 1/12 (土) 11:00~12:30
- 1/12 (土) 13:00~14:30

スペイン語 無料体験レッスン

入門者向け。事前予約制。
 日時: 1/8 (火) 19:00~20:30
 会場: 日本イタリア京都会館 本校
 講師: 当館スペイン語講師

ポルトガル語無料体験レッスン

入門者向け。事前予約制。
 日時: 1/9 (水) 11:00~12:30
 会場: 日本イタリア京都会館 本校
 講師: 当館ポルトガル語講師



編集・発行 / (財) 日本イタリア京都会館
 〒606-8302 京都市左京区吉田牛の宮町 4
 TEL: (075) 761-4356/FAX: (075) 761-4357
 E-mail: centro@italiakaikan.jp
 URL: <http://italiakaikan.jp/>